こゝろの光

融合の巻

念佛の十信十住十行十回向……一
覚と不覚……八
唯心の所作……一〇
摂取門……二一
待縁……二四
付録……一一一四

（念佛門の十信十住十行十回向）

十信

初、信心。自己の罪惡を信認し自己の佛性具するを信じ、如來の實在と本願力とを信じ、必ず自己は救濟せらるゝことを信じて疑はず、必ず聖種稱名號によりて救はるゝことを信じて疑はず。

二、念心。已に如來を信じて疑なきに至らば自ら愛念して忘るゝ能はざるを念心と云ふ。

三、精進心。戀念止まざる時は其實在を實驗せんことを欲して自ら勇猛精進に心行を策進す。

四、慧心。勇猛精進の力に由つて其實在を實驗す。已に自ら之を實感すれば其眞理を自覺す。故に智と云ふ。

五、定心。如來を分に實驗して其眞理を自ら證知するが故に自然と一心定力發し定心と云ふ。

六、不退心。已に自ら覺醒して其眞理を證信する時は其信が不退なり。

七、護法心。法は如來の眞理なり。已に得たる如來の眞理自ら失はざらんことにつとむ。

八、回向心。已に如來の心を我物としては如來中の我なるを信認し從來の我とは信の上に異り自ら意志も如來に向ふ故に回向心と云ふ。

九、戒心。已に（　）於て如來の聖意に稱ふ。如來の聖意に稱ふ意として一分の自律的道德となる。

十、願心。已に眞理を實驗し靈覺醒してより、志願は從來の我と異り靈的理想の如來の眞理を全く我物にせんとの遠大なる希望發る。之を願心と云ふ。即ち十信の滿位なり。

十住

十信は理性に於て如來を證信し如來心と衆生心との合一の眞理を證明したるも、未だ感情に於ては圓滿に融合し宗教的眞髓中心に於て合一の位置に至らず。

十住は眞髓中心たる心情に於て融合し如來愛化し靈活溫暖なる靈的信仰に到るは十住なり。住は心情に於て如來大慈悲心に安住して同化せらるゝの謂なり。

初、發心住。前に信に於て靈性開發し正しく自己の靈性は如來の一大眞心の我なるを證したるも、情に於ては如來の無緣大慈悲と自己の肉我中心の心情とに於ては大に異なれるを自覺し、益々如來を眞實中心的に我物とせんとの願心、即ち感情的の熱烈なる戀念渴仰の發心と現はれ、晝夜に憧憬し寤寐に忘るゝ能はざる靈的戀愛。

二、治地住。自己の心中に如來の愛光を受納せんとの素地を治め、心中發明淨瑠璃內に精念を納る。

三、修行住。若し如來の靈に接し我物にせずば寧ろ死すとも止まずとの修行にて心

地交渉します〳〵彼我の無碍なるを感ず。

四、生貴住。一心已に至つて先す忘想離れ無我の妙境に入り一心靈花開き微妙の靈香馥郁として神心融合不可思議なる、如來心と衆生心との入我我入、神秘融合の心情身心融液不可思議四面玲瓏、歡天喜地、言語道斷、心行所滅の時に如來の靈氣分を受く。此消息を楞嚴に衆生生理上の兩性交渉の例に譬へて行心行佛と融合し佛の氣分を受く中陰の身自ら父母を求むるが如し、（　）信冥通如來種に入るを生貴住と名づく、卽ち心情の信仰如來の靈と衆生の心との融合神秘の微妙の實感の時に於て如來種は自己の靈に托胎す。靈種を受けたるに例す。已に此妙境靈感をうれば。

五、具足方便住。楞嚴に既遊道胎親奉覺胤如如胎已成人相不闕名方便具足住。

如來の靈卽ち我心情に宿たるを佛の聖胤を奉じたること、一たび靈感をうればます自己の靈性に自然に慈悲の聖容は宛然として在すが如く、相好の心如來の大慈悲心もまた我心情に入り、此を觀經に是心作佛、是心是佛、正徧智海、從心想生と。三十二相好圓滿の靈相は我心に宛然、我心佛に成りしか佛が我心となりしか、是胎兒の人相已に具したるに例ふ。

六、正心住。容貌如佛、心相亦同、此名正心住と

七、不退住。身心合成、日益增長、名不退住。

八、童眞住。十身靈相一時具足、名童眞住

九、法王子住。形成出胎、親爲佛子、名法王子住

十、灌頂住。表以成人如國大王以諸國事分委太子彼刹利天世子長成（　）灌頂。

彼我の別をなして執意するは感情にあり。宗教中心たる感情に於て自己內我を亡じ靈我と轉する情操轉換肉我の汚清められ心機一轉し更生したる時卽ち法王子なり。

十　行

初、歡喜行。楞嚴に善男子佛子と成り、已に如來の妙德を具足し、十方隨順故云々自己の心情如來と合一し情操に於て佛子となり、如來は我父なり我は如來の子なりと

情操より意志を現し、情に於て靈的歡喜、此歡喜は平和靈福の感より衝動したる內如來靈性を自物とし、隨順は情操平和にして他人に對して心的に融合し、抵抗なく故に物に隨順す。

二、饒益行。善能利益一切衆生

三、無瞋恨行。自覺覺他得無違拒。如來の心光に依て自覺し自ら受けつゝある光明を以て他を覺らしむ。如何なる事に對しても瞋恨なし。

四、無盡行。如來の靈德の泉源より自己の意志に衝動せる志は無盡衆生を度する無盡、一切無盡

五、離痴亂行。如來神聖正義の光が自己を照して靈的意志より行ふ。

六、善現行。

七、無著行。

八、尊重行。

九、善法行。諸佛軌則

十、眞實行。清淨無漏一眞無爲性より

十　回　向

意志實行的修行十行の精練せられ金剛意志、衆生と共に眞善美界に向ふ。意志已に十住滿位に情操一轉してより從來の六道輪廻の不定的意志が回らして意向が彌陀に（　）して至善の淨土を目的とする決定意志なり。而して十行に於て道德練習卽ち如來靈化の意志として益向上し一層進みて如何なる逆境にも屈せず順境にも驕らず六度の行純熟して八風の爲にも動せず、金剛の志はいかなる惡魔の爲にも侵されず。

初、救護衆生。

二、不壞金剛、其壞すべきを壞し諸離を離る。

三、等一切佛。金剛意滿然齊諸佛。

（以下斷絕）

覺と不覺

如來の本體は是法身、如來藏、絶對不識精神態なり。

自性清淨心を如來藏と名づく。無明の風に因て動て生滅となる故に、經に曰く、如來藏は是善と不善の因根底、能く徧く一切の趣生を興造す。又經に、佛性緣に隨て（別味）と成る等。楞伽に云く。甚深如來藏而も七識と俱なり。

如來藏能く一切の法を攝し、一切の法を滅す。覺と不覺となり。所言不覺の義とは謂く實の如くに眞如の法一なりと知らざるが故に、不覺の心起て其念あり。念々自相なし。本覺を離れず猶し迷人の方に依るが故に迷ふ、若し方を離れては迷あることなし。衆生も亦爾り覺の故に迷ふ。若覺性を離れば則ち不覺なし。復次に不覺に依るが故に三種の相を生じ、彼の不覺と相應して相離れず。（一）無明業相の不覺に依るが故心動を業と名づく。動ずれば則ち苦あり。果因に離れざるが故に。（二）能見相。動に依るが故に能見あり。動かざれば則ち見なし。（三）境界相。能見に依るが故に境界妄に現ず。見を離れては卽ち境界なし。

無明能く一切の染法を生ず。一切の染法は皆是不覺の相なるが故に。

覺不覺　境界とは

如來藏覺不覺の十法界あり。覺に四法界。聲聞緣覺と菩薩と佛界なり。

如來無限の光に於て消極的に覺りて未だ積極に及ばざるを二乘と名づけ、積極的に分に覺るを菩薩と云。

覺に向ふ四位。

凡夫は前念の起惡を覺知するが故に能く後念を止めて其を起らざらしむ。故に覺といふも卽ち不覺の故に。

二乘とは初信の菩薩は種々の分別の念は眞ならずと覺して念に異相なく、麤念分別執着を離るゝが故に相似覺。

法身菩薩は心の根底を覺して世界心に分別麤念の相を離るゝが故に隨分覺と云。

等覺菩薩は方便を滿足し一念相應し心の初起を覺して心に初相なし。微細の念を遠離するを以ての故に心性を見ることを得。心卽ち常住なるを究竟覺と名づく。

世界念を離れて本覺と相應するを覺と名づく。

唯心の所作

三界は虛僞唯心の所作、心を離れて則六塵の境界なし。一切の法皆心より起り妄念より生ずるを以て一切分別を生ずるを以て卽ち自心を分別す。心心を見ず。相の得べきなし。

心は工畫師の如し。種々の五蘊法として造らざるなし。

如來は唯法身智相の身第一義諦にして世諦の境界あることなきも但衆生見聞に益を得せしむが故に。報應の二身を現して、

耶蘇教に云ふ三位の中第三位なる聖靈は大乘佛教の應身に相當す。信論に、佛の法身智相は絶對不識精神態の第一位にして法身よりも衆生の爲に菩提の因緣、大悲誓願を示して衆生界を度脫すべき契機をしめし給ふ。

天臺曰く、衆生の心に理十界を具し一界各々九界と變成すべき性能を具備、其形式の豫備せりと。今人類を以て云はゞ、個人は地獄乃至佛界に成りうべきところの性能を具備せるが故に、惡の誘惑によらば惡心を發し惡習性となりて惡道をも作りうべく善の刺戟によれば善の習慣性によりて善道をも感じうべし。寔に天然の心は此理を以て推す時は現在の人類の精神は六道を造り四聖を具す自由意志あり。人類は法身卽ち佛性を根底とすると共に世界的の無明生理機制の性質あつて根本的の罪惡を有し善惡相（　）して自由（　）意志を有なし。

一般の人類の精神の性格を檢せよ。十界は現に人の精神界に現實せり。

六凡四聖。佛性顯はれて佛性によつてすべての意象を支配するものは四聖なり。理

性内に潜伏して無明等の世界性質のみの精神生活は六道是なり。六道の中に云何か地獄を造る。

地獄とは逼迫苦惱の義、また倒懸の苦と云ふ。天然の根本罪のみならず但に邪惡の機能のみ發展し、內心邪にして外惡を造り獸慾を恣にして惡習性を造りて益々罪惡を造り痴闇にして、邪見、忿瞋憍は常に炎は胸を焦し天地に違逆し、八邪十惡五逆等惡の中の上品なるもの、他人彼を嫌ふこと其臭穢を惡む。是黑暗態の精神之を地獄道に向ふ人と云ふ。

餓鬼道に二種あり、曰く、有財鬼と無財鬼となり。有財鬼とは彼邪見にして貪婪强慾にして專ら我慾を逞ふし、彼が意志は常に利己主義公德正義あるを知らず、利己是れ事とし一身一己の爲に人を害ひ他を仆して己を厚うせんと欲し、不義にして富貴守錢奴。經に非法を作し、常に盜心を懷いて他の利を悕望す等の類彼が性格を名づけて有財餓鬼とす。

無財餓鬼とは邪見にして肉慾の甚だしきものなり。或は酒食、耽酒嗜美、飲食度なく肆心に蕩逸し魯扈牴突にして人情を識らず。徒倚懈惰にして背て善を作し身を治め業を修せず、家室飢寒困苦す取與節なふして衆人共に忠ふ、恩に負き義に違ひ、報償の心有ることなし、貧窮困乏にして復得ること能はず等。彼の肉慾の惡慣性より己をして困苦窮乏の苦を受けむ。是の性格を無財餓鬼と名づく。

畜生界。

一類あり。彼は人身を受くれども人格未だ完全ならずして動物的精神生活、獸慾を恣にして善知なく、倫理正行するをしらず。經に、朦冥抵突にして經法を信ぜず、心に遠き慮り無して但目耳の慾のみを貪り愛慾に癡惑せられ道德を達らず、瞋恕に迷沒し、財色を貪狠す、情欲を離れず、昏朦閉塞して愚惑に覆はれ、深思ひ熟ら計つて端正に世事を決斷すること能はず、便旋として竟りに至るもの、たとへ學藝ありといへども之を誤用し呑噬是事とし頑迷不靈、横行、之を蓄生性と云ふ。

已上三惡道といふ。倒と（　）と横となり。

修羅界。

修羅は鬪諍を好む性質。傲慢無賴、是三善道の下品なるを以て普通人格よりは憍慢のつよき我慢の故に鬪諍を好む。人を容るゝの雅懷に乏し。妬忌摯拗にして、退て畜生ほどの野蠻に非ずと雖も、人倫の秩序を完うせず。經に、讒賊鬪亂して善人を憎嫉し賢明を敗壞して師長に輕慢し尊貴自大にして己れ道ありと謂て横に威勢を行じて人を侵易し、惡を作して恥ることなし。自ら强健を以て人の敬難を欲し天地神明を畏れず。降伏すべきこと難し善なりと雖ども其性質に斯る枉なるは修羅性格。

人間界。

人格の定義は國民の文化の程度に依て標準を定むること難きも倫理秩序を全して、人格を（　）ない、進て四聖賢の世俗情操を脫し　聖靈の光の中に精神生活し、主我を脫して眞我の中に入ること能はずと雖ども、又退て傲憍修羅的呑噬醜穢の畜生にもあらず、常倫ありて之を履行し、世俗的道德秩序を自律的にし、修身齊家。社會の一員として生活し、人道的公德正義の完了せる性格を人間と云ふ。

天上界。

世俗情操凡夫の中の最高等なる精神格にして、內心正知ありて客觀的には極めて善良にして道德を以て身を莊嚴し、其修身倫理の世間の爲に欽量せられ、個人とし家族とし國家とし、倫理公德總ての倫理條目が諸方面に於て實踐躬行心に疚しからず。身に醜あらず。內外淸淨にして屋漏に恥る事なし。是倫理の標榜として衆人の仰ぎ見る處なり。經に、人能く中に於て一心に意を制し身を端し行を正して超然として群に拔たる意志を以て道德を實踐するものは身獨り度脫して福德上天を得るとの類是なり。

三惡三善は世俗的情操世界的精神の格を普通倫理の標準によりて之が區別をなすものなれども、是らはいまだ高等なる宗教に關係なきものなれば世俗倫理の範圍內にこの區別は立たるものなり。

孔子、ソクラテスの如きは共精神格は菩薩にありて共身は天上界の權化となりて道德仁義を以て人倫の光となりて人道を照す。また進んで人類の精神を靈界に導くに至らずといへども是世俗道德世界の日月なり。

聲聞界。

聲を聞て道を學び之を修する人。是より已下四聖は聖靈界の共精神が知力にも意志にも已に靈界に入りし人なり。聲聞は小乘敎の沙門等の因果情操志節迥かに世俗を出で世界動機を打破し清淨高潔にして尊ぶべし。

世界觀には現象界は幻迷なり、眞實に非ず、此世界を超て眞神世界ありといふも迷妄なり、偏眞空理是涅槃なりと。一切の身心共に苦なり、無常なり、眞理に非ず、迷なり。此身心を解脫して眞空是眞理なりと。

聲聞は眞理は眞空と知見し之を致一するは眞空は彌陀の光の消極の一面のみを見て未だ積極の無邊の聖德具有することを覺らざるなり。

緣覺界。又は獨覺とも

緣覺は聲聞の如くに敎を聞て修學するに非ず。自ら獨り研究によりて結果をう。聲聞は團隊を作て共に修行す。宗敎としては緣覺よりは利益廣きが如きも精神の靈界研究の程度に於て獨り進んで發明する處の知力に至つて緣覺に及ばず。

廣くは世界觀天地萬物の緣つて起る原理を研究し、哲學者といふべきすべての天地の始終人生の起滅の原因結果の理を究め性を盡し理を究め、品性を高尙にする、現象界の天然科學が唯物主我實我の執見の如きは高遠の志想なく靈性を養ふものに非ず。天然已上の玄妙に通究し志操を風塵の表に出づるものに非ずんば未だ哲人の區域に非ず。

佛敎の大乘の學佛者にして學理の研究にのみ性を養ふて未だ菩薩の情操志節なきもの。プラトー、エピクテタスの類カント、スピノーザ、デカルト、ヘーゲル等の屬の精神の性格。緣覺また獨覺と云。理を究め性を盡したる精練の寫象に於ては佛陀の靈

格に等しきが如きも未だ絕對なる神を理想とし神の慈悲と致一的に一切の衆生を一慈悲の光の中に救濟し智德完全にして衆生を一子とし救靈すること能はざるは未だ遠く及ばざる處。

菩薩界。

菩薩とは自覺覺他の意味にして先に自ら覺しとは緣覺の天地の根底をさとるが如くに自ら認識し、彌陀の實在を佛知見によりて實現し、內面は佛陀の精神と關係致一的にし、佛陀を理想とし智を研き德を修め二乘の如く消極的に知力の一方面にのみ到達せしに非ず、積極の萬德莊嚴の宏業につとめ、道德的情操堅固にして一切をして自己と同じく理想の一慈悲の光の中に統一せしめんと欲して、之が世界解脫の終局目的を以て自己の目的とし共理想は佛陀を以てし欲望は佛陀の萬德圓滿の域に進むにあり。

菩薩に二種あり。應身の佛陀を以て（即ち報身の權化）理想とし模範とし之に向ふて實行するものと、客體の法報二身を以て客體の知見によりて致一的解脫靈化と救靈をいのると。甲は自力と云、乙は他力と云。

智者達磨清涼等は甲に屬し惠遠善導等は乙に屬し馬鳴龍樹天親等は兩、智者も爾りキリスト、マホメット等は若し隨類の菩薩と云はゞ乙に屬すべし。

客體の眞佛の關係によらず眞佛には間接にして卽ち應身の人佛陀を理想として自利々他の菩薩と、

應身の佛陀は客體の眞佛の紹介者とし敎主とし常恒實存の絕對的光明の直接の關係によりて解脫するものと。

佛界。

客體なる眞の佛陀の實在を示さんが爲に人身を以て應化し、隨他の時には世界的道德より超世界的道德に進めて、また理性を曉らしめ隨類種々の化を施して人格を以て佛陀を實現したるものなり。

隨自の方面より見れば我內面は我牟尼に非ず。我大我卽ち阿彌陀佛。佛彌陀の絕對

精神の外に我あるなし。彌陀の無邊の聖德靈福ありて法界に周徧せり。悉く信ぜよ。衆生に理性あり。皆阿彌の分子なり。主我を棄て阿彌に歸せよ。無窮の光と共に同化せん。阿彌の外に歸着すべき眞理あるなし。若し人阿彌陀に歸せば絶對の理性の中に入らん。阿彌を信ぜば自己を解脫して彼の神聖に同化すべし。我理性阿彌と同一、汝らも同一。是を統一するものは阿彌。汝ら活動の機あり。阿彌を信念する時は無限の靈福を與へられん。我も阿彌を信念す。我阿彌我に在て活動す。卽ち我を見よ。經に、爾時世尊姿色淸淨にして光顏巍々たり。是絶對の阿彌牟尼が胸臆に在て實現せる表象なり。佛陀は正覺已來常に身口意の三業を以て彌陀の實在を實現せしなり。彌陀の光に解脫と靈化の功能あることを示されたるなり。

佛陀は人類の精神最高等のもの、共知見の明晰なる道德的情操純潔無垢高尙にして偉大の靈格にして救世主と爲り世界の光となりて人類の大なる榮光を增す。

攝取門

如來の方より云へば究竟果分十佛自境界。世界より云へば普賢境界。法界緣起は乃ち自在無窮十玄緣起無碍。甚深十玄四法界の事々無碍法界法性融通緣起相由等に由るが故に、事々相卽し融通無碍なり。分限隔別の障碍の法卽入遍容不可思議諸義門の中深奧超絶たる事々無碍法門の如きはなし。

法界緣起自在無窮とは法界體性は本來自衡、有佛無佛性相常然、古今常恒に安住廓然、舊來緣起して始終を遠離す。衆生の本源、諸佛體性、諸佛所依、衆善の幹宗、萬德の所歸、實に此の甚深法界而已。

宇宙本來唯佛與佛自證境界、果分自內證處圓融自在德相入有りと雖も、唯佛與佛自證境界機所見に非ず。

果海中相卽圓融なしと云ふべからず、因分所有の一切法門は果分自證の中に在り但

等自境界機根に示すに、與に共因果の異とす。

圓融自在、一卽一切、一切卽一、不可說共狀相、究竟果分國土海及十佛自體融(義)等の如し。乃ち共(事)なり。因陀羅及び微細等を論せず此不可說に當る。

文殊師利承佛神力觀察大衆頌曰快哉今菩薩會爲未曾有諸佛正當分佛刹不可思議佛住佛國佛法佛刹淸淨佛說法と、佛出世佛刹記諸佛三菩提皆不思議是果分依正二果自證境界不思議なり、佛國果分依報不可思議。

果分果佛自體所住依報は因人不測絶離見聞故曰不可思議、果體甚深共因人に望めば言語を遠離し甚絶思慮不可說故不論重々帝網。

緣起圓融法門一切並是法界家中本來具足相貌無盡元來成就法性常然已去來今常恒自在周遍無碍本有功德是新成に非ず、是法界家實德。

本自德相恒爾成故德相の上隨機變現爲業用卽德相を全して業用を成、一切業用を全して是德相、普賢境因分法門攬果爲因全レ因入レ果。

諸緣起二義　異體同體

一、不相由　謂自具德故　因中不待緣　同體

二、相由義　如待緣……異體

二門
- 相卽　諸緣起二義
  - 空　自空他必有、自卽レ他、自無性他作故　何れへか相卽せざるを得ず
  - 有　自有他無故他卽自他無性故
- 相入……
  - 力　自有全力、攝他、他全無力、入自
  - 無力　力用交徹

用を以て體を收むるに更に別體なき故に相入す。以レ體收レ用無二別用一故唯是相卽。

相入——一中具多緣起、一緣を去らば不成。自性なくんば一多の緣起成ぜず。無性なるに由て一多の緣起を成す。

相卽　二門向上去、一緣成故一卽十、一なければ十無故　一有(餘)空一より十に向向下來十より緣成故十無れば一無きが故に一緣成無性の一。相卽相入等無盡を成す。

待　緣

一、增上緣。

色心法の生ずる時疎助に力を與へて因をして果を感ぜしむるを云ふ。彼の五根が五識をして住せしめ識をして境を緣せしむるが如し。勢力增上にして或は順じ或は違し因を助くるに必ず勝れたる勢力あり。

二、等無間緣。

心々所法生起の時前念の心々所が間避引導して後念の心々所の法を生ぜしむ。若し現在の心法が落謝して過去世に入らざれば後に生ずべき心法生起すること能はず。前心雍住して間避せざるが故に。今此の心法因緣を具足して現世引導力に依るが故に後心生ず。前心後心皆な一類にして共に是れ心法の故に等と云ふ。念々前後の中間の隔あることなきが故に無間と云。

三、所緣々

心々所の生起する時所緣の境に託して生起することを得。若し所緣無れば心生ずること能はず。所緣の境を以て緣とす。境に依つて心生ず。故に心能く境を變ず。此二心一念なり。

此の二緣は唯心々所の起る時に之を具して色法には此二緣あることなし。

附錄

二六

天地萬物、山河大地一切の動植物に至るまでも悉く皆法身如來藏の影現ならざるはなしてふ、佛陀の教に本つきて觀じ來れば、野に山に綠りと現はれ黃と化る、千變萬化の現象界、皆隨緣眞如のすがたに、妙また妙ならざるはなし。殊に〳〵ありがたきは、宇宙萬有中最上無比の現はれなる無量光如來は、衆生の大慈悲の御親として光明遍ねく十方法界を照し、殊に念佛の衆生を光明のなかに攝取して、子をおもふ親の慈悲のしからしむる處、つひに信仰の靈を養ふて親子の對面できるやうにして下さる。

大ミオヤの慈悲よりかたじけなきはなく感じられ候。

二七

實に夢幻の世の中に種々さま〴〵の人事同じ日日を暮すについて、すべては因緣に任せて而して如來大悲の光明に日ぐらしせんことのみ希ひ候。

二八

北風寒き日も、如來大悲の懷の裡は暖かに、霏々と雪降る闇き夜も、彌陀光明のなかに明るきを感ず。

たとひ身は娑婆八風の吹荒む中に在ても神は無爲泥洹の淨土に栖あそぶ。讒謗誹毀の荒砥を以て砥がざれば佛性のさびは除く能はじ。

此世界を樂しく觀るも苦しく見るも皆人々の心丈に觀じて居るものとおもはる。印度の有名なタゴールは凭云つて居る。此世界萬物は悉く神の善から顯はれたものであるから、すべての物を能く心を用ひて見れば悉く喜を呈して居らぬ物はないと。吾人は宇宙萬有は悉く如來の淨光歡喜智慧不斷の光力を被むりて居らぬ物はないとおもはるゝ。先づ朝起て太陽の東の天から昇る空を眺めても實に清らけく、新たに鮮な事よ

本とうに淸淨光が萬物に滿て居ればこそ凭はきよらけく現はれる。而して天道樣の御而には滿面の歡をたゝへて居らつしやる。而して世が一面に明くなると只今見へなかつた山河大地一切が明らかに見ゆるは、智慧の現はれとおもはるゝ。また太陽の赫々たる御勢ひは不斷の活動なさるゝをみても、どうしても淸淨等の光明の現はれとより外はみへぬ。

地上にある萬物一として、其が現はれともはる。雨のふるのも空氣を淸らかにする爲に雨がふるとき面白そうに雨が降て居る。而して降ては流れまた蒸氣と成りて空に昇りなどして不斷の働が休むことがない。

我等のからだでも、よく知らぬ人は垢が出てきたないと申すけれどもさうではないからだの働きは、毎日食た物で後を補つて新陳代謝して、不斷に新たに淸く潔くして居る。新しく淸くする目的の爲に、一方の方に除去る方を見て垢をきたないと云のは其垢とてもつひには淸められて、草木などの新しい淸き物にかはりて出て來る。から

だの中の血のめぐる處、またすべてはいつも喜をたゝへて居る。かようなわけでありますから、私共の心も成るべく大御親の光を我心として、常にきよらかに快よく潔よく歡喜に充され、不斷の活動しておやさまの御意を意として生活いたし度存候。

二九

時下新綠ます〳〵みどりの色の添ふるを見るにつけても法身の大みおやの萬物をめぐみ給ふ御いつくしみをおもはざるを得ず候。

報身の慈悲の光明も私どもの心をいつくしみたまふこと、尙々深きことなれば、私どもも草木のやうに眞正なこゝろにて大みおやのまに〳〵念じて居りしなれば、信念のみどりもます〳〵色まさりゆくべき筈なるに、凡夫のこゝろの淺ましさ

大みおやの聖旨のまに〳〵こゝろを用ひず、自分のほしいまゝなる念にて日を送り夜を明す。

太陽の常に照せるごとく

大みおやの光明は私共の心を照し、此頃の氣候のそれよりもいやまして私共に對してはぐくみの力を與へたまふなるも、我ままものゝ常として、無始已來の習慣に捕はれて高く高く淸きに〳〵向はしめ給ふ　あなたの聖旨に隨ふことの出來ぬ愚さを、おもふにつけて、賴むべきは大みおやの御じひにすがることに候。

光陰過ぎ易し、もはや三年と申は經にけらし、おもへば實にも賴み無の世にて候。

さあれ大みおやは無限のかぎりなき生命を我等に與へたもふ。我等はかぎりなきいのちを我命として下さる　大みおやの御子にてあるとおもへば有がたくぞ感じられ候。

三〇

其後如何被爲在候哉御無音に過し多謝候。愚衲十月初旬より靜岡敎區講習會に賴まれ、越後國を十月三日迄にして、淺川より東京を經て富士山麓大宮町に至り候。其れ

より三河より歸京二十二日は兼て御話候　時宗の昔の大本山當麻無量光寺に至り候。愚衲は光明主義を本として、淨土と時宗とを兼務候、恰も此頃の稻の如くに草の方は一日〳〵に枯稿に向てゆくなれども果實の方は活ける方へ〳〵と成熟する。草は枯て再び蒼青とは還らぬ、實は成熟するに隨て活て來るから、來年苗として綠々と生る。むかしの淨土宗は稻草の如くに、年々に枯る氣節に向てゆく、光明主義の實は活る方〳〵に向て何れ幾世紀の後には立派に活て來るに違ないと信じて、一心に如來さまに奉仕いたし候次第に候。

當麻山は光明主義の支部に過ぎぬ。本部は無量光如來の在ます處にて候。願くは枯ゆく草をも大事なれども、將來の當に芽發せんとする光明主義の宣傳に力を注ぎて下され給へ。一人でも餘計に活きんとする信者を造て下され度候。

三人の新發意の菩薩の爲に

如來の聖容を拜寫して御送申こと大に延引と相成候へども此に添て御送申候間、落手の上御わかち下され度候。

先は當要如斯御座候。和南

三一

量りなき壽の御名をたたへては
先づあら玉の年をことほぐ

舊冬御別れ申してより、途中大に暇取れ漸く二十六日歸京候。例によつていつも御無音の段多謝候、外は寒風肌を裂くとも、こゝろは彌陀の暖かなる慈悲の懷に在り、日々雪の空あいにてくもり勝なるにも、こゝろはいつもはれ彌陀の光明中にあらまほしく候。西行法師の「世を捨てて身はなきものとおもへども雪のふる日は寒くこそあれ」彼の西行法師は世を捨て身をなきものとおもふと云ふ。我らは彌陀に御任せ申してからは、我身ではなく、アナタの物である。また世を捨たではな

く、彌陀の光明の中の世にて我等はみだの給物なる我身、寒さもあつさもあなたのよろしきあなたの御働らひにて此世にありし身、

此土の一日一夜は、淨土に於て百歳するよりは勝れたりとの事なれば、寒きもあつきも中々容易ならぬ時間なれば、成べくむだにせぬ樣にして、而して有緣の人々に如來光明を讃美して共に唱へ、共に歌ひ共に讃美し、共に法味を味はひ共に悅び共につとめ一生懸命につとむべきをつとめ行ふべきを行なひして居れば、作す業の爲めに心がはいるから寒さあつさを感ずるいとまなく候。而してつとめらるゝ丈けつとめてつかれてくればまた快よく眠られることにて候。

自分の事をおもふといろ〳〵の苦も惱も、胸の隅の方よりいくらも〳〵湧出して來るから、たゞ〳〵如來さまの方をのみおもふて我をわすれて念佛し讃詠して居ればしらず〳〵佛と共にはなれぬように相成候。佛と共に居る心が卽ち一分の極樂にて候。何はともあれたゞ〳〵佛と共に在らんことをこそねがはしけれ。

三二

光陰過ぎ往く事最疾く既に本年も秋過ぎて初冬を迎ふ時と相成りぬ。人間萬事皆夢幻。唯須らく常住無爲の道を求めて眞に入るにはしかじ。善導大師曰く「三味無爲卽涅槃」と此意は若し人念佛三味に入ぬれば、其精神は卽ち彌陀同體の心證なれば、深く彌陀三味に入る時は、自己と彌陀と精神的に一體と成る。然れば卽無爲涅槃は卽極樂の事なり。極樂とは阿彌陀如來在ます處。一心念佛して彌陀と離れざる心は其念卽ちみだと共に極樂に安住するなり。假令身は娑婆に在りても、神は卽淨土に安住するなり故に三味卽涅槃と讃しなされたのと信ず。

此心の外に往生する體なし。此心の外に成佛する體なし。一心念佛して彌陀と合一す。卽ち此心なり。一心に佛を念ずる故に此心卽ち佛となるなり。されば觀經に是の心佛を作る。是の心是れ佛なりと。往生と云ふ事に死ぬ事に非ず。彌陀に助られしすがたなり。彌陀に助けらるゝと云ふは、彌陀の光明を獲得したることなり。光明とは如來の靈體なり。靈體卽ち本願力なり。本願力とは卽ち念佛なり。念佛する故に此心佛と成るなり。念佛とは例へば香を衣に染る時は衣もまた香ふが如し。佛を念ふ時は我心も佛と化す。

我心佛と成る時は、宇宙悉く佛境界となる。例へば青眼鏡を以て見る時は、萬物悉く青色と變ずるが如し。佛を念して佛心が我に薰染する時は、我心卽ち佛と成る。何ぞ夫れ疑はむ。唯自から念佛して其眞なることを信知し給へ。

三三

大おやさまの大きい〳〵おじひを力にして、すべての考へや思ふことを、みな、大おやさまにあげてしまつて、

大おやさまの御じひをもつて、心の中に一ぱいにして置くように、のぞましく候。

いつかも申した、心が如來さまの方へ向て居る時は、いづくも、光明であかるいありがたい、うれしい、まんぞくである。其反對に、如來さまを背にして居る時は、闇い日かげの方へ向て居るからくらい、くるしい、いやな、胸のうちがくさくさしたり不足の念にみたされてしまふ。

丁度天道さまの方へ向て居方は、いつでも日向で、うしろはいつでも、日かげであるようなものである。こゝろの天道さまは如來さまである。

むねのうちに自分でしきれぬ時には、大おやさま〳〵と御名をよびて、おやさまの御じひを仰ぐときは、忽ちむねのうちにおやさまが御はいりなされて、而してむねの内をごくらくにして下さる。

實は極樂といふ處はどこかと云へば、如來さまのまします處である。であるから自分のむねのうちに、御じひのおやさまがましませば、ほんとうに、むねのうちがごくらくである。それと反たいに、むねのうちに、ぼんのうの鬼が、かつと、まつかの赤

鬼のように、瞋恚のほむらをもやし立て、己れとつて食てしまふかと云ような、こゝろに成ると實に恐ろしい鬼と成る。またうらめしざんねんの青鬼が胸のうちに角出して人につきかゝる時は、青鬼である。

胸のうちに大慈大悲のおやさまが、光明かくやくとして、我心を照して、ありがたさいはんかたなきすがたは、實に其心のさまは、觀音ぼさつと同じ事である。

觀音さまは御つむりの寶冠に、あみだ如來を戴いて御座る。それは心に如來さまを忘れずして憶念して居るこゝろである。手に蓮華をもつて居るのは、念佛する人の心は蓮の花のようであるといふ。蓮は、どろの中より出でて、濁りにそまずして、きよくいさぎよくうるはしくかんばしい。念佛する人のこゝろは、ぼんのうのなかより、ありがたい、きよらかな、かうばしいほんとうにいさぎよき、花のようであるといふたとへである。

悅こびなされ。此たび彌陀の本願にあひしことを。御慈悲の親さまは、むかし〳〵より迷の子らをあはれに思召て、やる瀨なくいませしも、ほんに我等のあさましさりとはしらで、迷に迷ひて、はてしもなき二十五有の苦のなかに、ありながら、なほあきたらず、今もたゞ〳〵うか〳〵と、眼の前のことにまぎれて、明けても暮れても今日も空しく暮し、今夜もいたづらに明かし、ほんとうに心の底から、親さまをしたふ心もいでず、此身を忘れて御恩報謝のつとめをもできず。どうか、しばしのほども御慈悲のふかきを念ひ、光明のなかをでぬように、暮さんことをこそ、ねがはしく候

三四

實に本春來の御修繕につきては、容易ならざる大事業御熱誠の加はるべき處に、佛天の力は加はる事、こゝに至り候ことを思惟すれば、まことに有難き事に存候。御堂の清く改たまると共に、擅信家の信仰心のいよ〳〵新たにして、また新たならんことをねがはしく候。

惠心僧都の御詠に

法の身の月は我身を照らせども
無明の雲のみせぬなりけり

如來の皎々たる滿月は、永しへに照らしませども、信心の眼が開けぬほどは見へぬなり。

法然上人の

あみだ佛と申すばかりをつとめにて
淨土の莊嚴見るぞうれしき

如來はいつでも此處にましますけれど一心不亂に念佛三昧修して心が發けざれば光明に觸るゝことはできぬ。

けれども太陽は見へねども、信心の夜が明けて、日光のなかに明し暮しする人は、同じ光明生活、實に有難く存候。

昭和七年五月十三日　印刷　　貼代郵稅共
昭和七年五月十五日　發行　　年二四
編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　小林七太郎　小石川區關口町六十五番地
印刷所　靜文社印刷所　小石川區關口町六十五番地　電話牛込五四一九番
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番